

かくしてこの作戦は終了し、我が部隊は満州関東軍に編入となり、その後「沖繩」「南方面」「千島方面」と部隊はばらばらとなり、終戦を迎えたのである。

遼行

東京部 山崎純夫

大東亞戦争末期の湘桂作戦は、中国奥地の米空軍基地の覆滅と、中国大陸と南方を陸路で結ぶことを目的とした作戦であった。

湘桂作戦が始まって三か月余、ようやく兵の疲労度が目に見えてきた。それに、食糧、衣類、弾薬の欠乏、このままでは漢口はおろか桂林、柳州まで到着することもおぼつかない。広州から少しずつ作戦のための諸材料が後送され、兵の疲労も癒えてきた。

思い出せば前線基地の江門を出発し、要衝の地、三埠を抜いて待機すること三カ月、ついに次の目的地、梧州への攻撃命令が出た。

梧州は古くから物資の集散地であり、また軍事上の要衝の地でもあった。梧州で西江と桂江が合流し、滔々たる大河となり、下って広州近くで珠江となり、南支那海に注ぐ中国で三番目の大河となる。

梧州への一番乗りを命令されたのは我が中隊の属する井上大隊であり、この上もない名營のことであった。三埠を出発してから関平、新興、鬱南と小競合いの末、敵を撃破し、ひたひたと一路梧州へと追った。広東のデルタ地帯と異なり鬱蒼たる原始林の中を進み、湧水は生のまま飲めるほどに澄んでいた。

一城をほおむると一口にいうが、その前に密偵、将校斥候、忍者部隊、威力偵察等々の工作があり、初めて攻撃開始となる。また、突然敵と遭遇することもあり、丘の上から狙撃されることもある。

昭和十九年九月二十日、ついに部隊の先頭は西江を見下ろす峠の上に立ったのである。

鳳兵団により梧州は既に占領されたという情報が伝わってきた。一番乗りの夢も消え去り疲労がどっとでた。梧州入城式も儂い夢となった。

そんな時である。鬱南で他部隊の戦利品の兵器弾薬を都城圩まで船輸送せよとの中隊命令を受けたのは。我が大隊の戦利品ならまだしも他部隊の捕獲品兵器輸送とは割が合わない。まして大砲や小銃は日本の弾と口径が異なるので役に立ちそうもないが、命令なればいたし方ない。早速、我が第三小隊を中心に、第一、第二小隊から兵を選抜して特別輸送班を編成、鬱南から公路を右折、一路西江へ急いだ。

なるほど、民船十数隻に兵器弾薬が満載されている。西江の流れは滔々としてとどまるところを知らない。その上、制空権は完全に米軍のものである。

西江の岸に立って思案にくれてしまった。エンジンのない民船、人力曳航、そして流れに棹さすのでなく遡行するのである。米軍の制空権下で昼の行動は危険極まりない。といて、この激流では夜の遡行は危険この上ない。加えるにゲリラの出没である。予備士官学校で習った歩兵操典にも作戦要務令にも載っていない行動である。早速、下士官の集合を命じ会議を行った。幸い房州出身の兵が中心だったので、下士官の中にも兵の中にも舵

や櫓の操作のできる者が一〇人近くいた。

協議の結果、次の決定を行った。

一、舵、櫓の扱える下士官または兵を一人必ず一隻の舟に乗せること

一、その他一人を補助として乗せること

一、一隻に三人曳引する兵をつけること

一、遡行は昼間とする

一、河岸から一畝以上、沖に出さないこと

一、P 51の爆音が聞こえたら他の舟にかまわず舟を繋

留して、陸上に疎開すること

その他細かいことを打ち合わせて散会した。遡行中知ったことだが、河岸から五〇桝から八〇桝の幅で水が逆流していることである。

一隻五人として四〇人では八隻しか曳航できない。捕獲品を整理し八隻に配分し、その上をアンペラで覆う。

積載荷物の整理を完了し、日没を待ち工兵隊の助力を得て西江本流に乗り入れた。

少し遡行しようとしたが、予想より遙かに激しい水勢に押し流される舟が続出、あわや波をかぶり転覆しそう

な舟も出る始末。予期せぬ岩石がところどころ露出して行く手をさえぎる。岸辺の岩にかけた手鉤に結んだ一本の綱を中心に、人力による曳航する以外方法はない。しかし、この作業も真つ暗になると足場が危険で、作業不可能と判断し中止する。

入江に舟を集結、ゲリラの襲撃を徹夜で警戒しながらまんじりともせず夜を明かす。

翌未明とともに出発、どうか敵機の襲撃のありませぬようにと、祈るような気持ちで空を仰いだ。

まったくの一進一退だった。一〇時遡っては五時流され、一〇時進んでは五〇時後退する。なかには波をかぶり水浸しになり、大急ぎで鉄兜や飯盒で水を汲み出す舟も出てくる始末。

広州市駐屯中は糧秣廠勤務の者をうらやましがったが、輸送にこんな苦勞があるとは思わなかった。時折り、P 51が西江沿いに飛来してくるが、我が輸送船団を単なる民船と見なしてか過ぎ去っていく。それでも時には超低空で飛来し、肝を冷やす。

半日もすると兵も舟も水に馴れてきた。流されること

も少なくなり、舵を取る兵と舟を引く兵の呼吸もピッタリしてきた。崖の上から狙撃されたら、ひとたまりもないなと思いつながら、その時はその時さと腹をくくっていた。

戦後判明したことだが、第二次湘桂作戦のための部隊が続々と梧州周辺を直指して集結中で、西江の右岸も左岸も比較的安全だったようである。それでもビューンという流れ弾にスワツ敵かと緊張する。

悪戦苦闘の十数時間、ようやく目的地の都城圩に着き、小舟を岸に引き揚げ擬装し終った時は、日はとっぷり暮れていた。思えば緊張の極みのまる一昼夜であった。

パンチーパンチーも戦争なら、地道な輸送も戦争であることを肌で知った一昼夜であった。おろかな戦争をしたものである。

英国一〇、米国一〇、日本六の主力艦の比率では絶対勝ち目がないといっていた海軍が、英米二〇、日本六の比率で太平洋戦争に突入したとはどういう神経なのだろうか。制海権なくして勝算があったのだろうか。

古今無双の上杉謙信が小田原城をついに陥落できず、

豊臣秀吉が持久戦でこれを落としたのは、一にかかつて輸送力にある。

そういう意味においても貴重な二四時間の経験だった。

青春の記録

山口県 井上文夫

昭和十七年三月、山口県師範学校を卒業して小学校に赴任、一年足らずの勤務で、現役兵として山口の四十二連隊に入営したのが昭和十八年二月一日であった。

間もなく独立歩兵第五大隊に転属命令が下り、山海関經由で当時の中華民国浙江省杭州に着いたのが二月二十一日であった。いよいよ本業基本教育を受けながら浙東地区の警備及び戦闘に参加することになったのである。

昭和十八年十月十日、甲種幹部候補生を命じられ、十九年一月六日、保定幹部候補生隊に分遣の命下り、一月十五日に北支保定の予備士官学校に到着、極寒の地において大東亜戦役の支那方面勤務についた。

昭和十九年八月二十一日、教育終了、兵科見習士官を命じられ、杭州の原隊に復帰した。この間、私も幾度か戦争に参加し負傷して野戦病院に入院したこともあるが、原隊にいた同年兵の幾人かが戦死したことも聞き、後に続く覚悟を新たにしたのであった。

そして間もなく次のような作戦命令を受けた。

(軍事極秘)

歩六一旅作命乙第一〇六号

歩兵第六十一旅団命令

十月二十八日 〇七〇〇

杭州

一、師団工兵隊ハ製材班(移動製材器ヲ附ス)ヲ編成シ寧波ニ派遣ス

二、旅団ハ前項製材班ノ杭州―寧波間ノ輸送ヲ実

施セントス

三、井上見習士官ハ第二項製材班ノ人間器材ヲ十

月三十一日杭州発ノ連絡自動車ニ依リ寧波ニ

輸送スベシ

歩兵第六十一旅団長 西脇宗吉